

玉の緒よ絶えなば絶えね長らへば忍ぶることの弱りもぞする

— 古典和歌の探究・研究が持続可能になるリノベーション —

江戸 英雄

要旨

拙論は中高大の教育を連結するブリッジを考えながら古典和歌の探究と研究が持続可能になるように教授法をリノベしてみた事例的研究である。ついては、式子内親王の「玉の緒よ絶えなば絶えね長らへば忍ぶることの弱りもぞする」という歌を中心に、儀同三司母の小倉百人一首の歌や式子内親王の家集の歌等を取りあげた。背景の伝記的な事柄より題詠歌であることを先ずきちんと押さえるべきだとの考えに基づき、「忍ぶる恋」の歌としての特色についてまとめた。題詠歌では恋愛初期の、表面上は恋していないが胸の内では恋愛の葛藤が抑えがたく生じたという構造の歌が基本だが、式子内親王は恋愛の初期の一点よりその全てにわたる比重を取るように詠む。その型破りな特色を、俊成卿女の同題の歌と比較したり伊勢物語・源氏物語等の歌を押さえたりして確認した。末尾に、謡曲定家が題詠歌としての特色を押さえて引用していることや、八代抄により定家の「玉の緒」の理解が通解と異なることにも言及した。

一、はつめ

本稿では小倉百人一首(八九)で有名な式子内親王の歌を取りあげる。

玉の緒よ絶えなば絶えね長らへば忍ぶることの弱りもぞする

この和歌教材^①は、初句が呼びかけの独立語で、第二句も命令形で句切れになるという、「他者」を意識したような表現を持つ。だから、もしも何の予備知識も前提もなければ、例えば、あなたに会えるなら死んでもかまわないと言ってきた男に、今にも心中しかねないくらいの激しい気持ちの歌を切り返したと思う人もいるかもしれない。これからの生きながらえる命の大事さよりも刹那的な恋愛の情念のほうに重きを置く、極端に恋愛至上主義的な秘め恋(「忍ぶる恋」)の歌だと。

しかし、これは実際に男と恋愛して詠んだ歌ではない。新古今和歌集卷十一恋一の歌(一〇三四)^②の詞書には「百首の歌の中に、忍ぶる恋^③とあり、歌を百首詠めという課題の中で「忍ぶる恋」を題として詠んだ歌である。

従来、この歌は二つの方向より取り上げてきた。適齢期に恋愛を禁じられていた作者の境遇・人生を踏まえて「忍ぶる恋」の真実らしさを鑑賞するのが一つ。もう一つは題詠歌であることをまず押さえるべきだという立場である。ここでは主に後者の教授法について検討結果をまとめてみたい。

題詠歌とは題を課して作った歌である。無名抄^④に「歌は題の心をよく心得べきなり」とあるとおり、作歌にあたっては第一に題の意を外さないように注意する。その際、題の文字すべてを歌に入れなくてよい。そして「恋にはわりなく浅からぬよし」を詠むなど「必ずこころざし深く詠む」ようにする。その題の意を表現した先例があれば参考に

するなどして構想を練る。「よく古歌などをも思ひときて、歌のほどにしたがひて計らふべき事なり」とされる。とりあえず決まりは以上。現代の課題作文では個人的な体験を入れるとよいという指導もあるが、題詠歌はそうした決まりがないことに留意されたい。

そこで、実人生云々の見方は脇に置き、この題詠歌のルールにのっとりてあえて一から考えてみることにしたい。例えば、題知らずであるが、詞花和歌集卷八恋下に平公誠の次の歌（二五〇）がある。

逢ふことや涙の玉の緒なるらむしばし絶ゆれば落ちて乱る

これは「忍ぶる恋」の歌でなく「見れども逢はぬ恋」の歌である。また「玉の緒」の意が「玉の緒よ」の歌の通解の命とは異なる。よって先例とするには見当外れのようなだが、便宜的にこれを秘密の相手の久しぶりの〈贈歌〉と仮定して考えてみたい。

〈返歌〉としては、相手が逢うことだとした「緒」をまずプツリと切れるにまかせた。それも「しばし」という猶予すら与えないでそう決めたことになる。もとより玉の緒というものは長くなるとそのぶん玉の重みに耐える力が弱くなり切れやすい。これを敷衍すれば、秘密の恋愛関係というのも、長く続けると、浮き名を流すまいとがまんして秘する力は弱まり、結局は涙を流す破目になる。それで、切れるにまかせて泣く泣く歌を返したというのである。これはこれで、結局醜聞になるくらいならばいっそ「忍ぶる（／忍びざる）」心を詠んだ「こころざし深」い秘密の恋の〈返歌〉と言えようか。

このように、歌そのものは、実際に恋愛をしたり歌の贈答をしたりしてはいないので恋の状況を何らかに仮構して詠んでいると考えてみるができる。後述する題詠歌の決まりと異なるけれども、平公誠の歌であつてもある程度まで参考になるくらいに歌は自由である。作者その人のパーソナリティ^⑤や題意、歌語の通解をこそと外してみると、

こうした観念的な歌の世界が雪割草のように出現してくるのである。

そこで、ここでは、この「玉の緒よ」の歌の題詠歌としての問題、観念的な特色について、ほかの和歌教材との比較などを通して、さらに明らかにするように考えてみたい。

二、ブリッジ―中高大の接続―

まず、比較検討の用として、同じ小倉百人一首の中より、高の内侍（儀同三司の母）の歌（五四）「忘れじの行く末まではかたければ今日を限りの命ともがな」という一首を取りあげたい。この歌は、「玉の緒よ」の歌とは詠歌の事情が異なり、夫となった男に対して詠んだ恋の歌である。新古今和歌集卷十三恋三の歌（一一四九）の詞書に、「中の関白通ひ始めはべりける頃」に詠んだとあり、中の関白、枕草子や大鏡等で有名な藤原道隆が相手であった。

歌の表現について考える前に、作者のことを少し説明しておきたい。作者名の「儀同三司」とは、枕草子や大鏡で有名な藤原伊周の通称である。長徳元年（九九五）四月に父の関白道隆が四十二歳で急逝した後、伊周は叔父道長との権力闘争に敗れ、翌年四月に内大臣から大宰権帥に左降した。その後、同三年に赦されて帰京し、寛弘二年（一〇〇五）に大臣の下で大納言の上という地位が宣旨により定まり、准大臣の意で儀同三司と称した。

儀同三司の母は名を貴子という。父の高階成忠は一条天皇の東宮時代に学士を勤めた儒者であり、正暦二年（九九一）に従二位に叙した人物である。貴子は若くして父譲りの賢才を評価され、円融天皇に内侍として勤仕したので「高の内侍」とも称した。没年は長徳二年（九九六）とみられ、栄花物語の浦々の別れの巻によると、四月に愛息の伊周・隆家の左遷が決まり、十月に筑紫へ向かう伊周と最後の別れをし、そののち程なくして亡くなったとみられる。つま

り、儀同三司の母という歌人名は、この波瀾万丈の全生涯を思わせる作者名であるのだが、道隆からすると、儀同三司の母という呼び名は知るよしもない。ここでは「高の内侍」という呼称を便宜的に使用したい。

また、「忘れじの」の歌が作られた、「中の関白通ひ始めはべりける頃」についてであるが、二人の初めての子伊周が天延二年（九七四）に生まれているので、そのあたりが目安になるはずである。

康保四年（九六七）に十五歳で加冠した道隆は、天禄二年（九七一）に右衛門佐に任じたが、翌年、摂政の伯父伊尹が薨去すると、父兼家と犬猿の仲であった伯父の権中納言兼通が、村上天皇の中宮安子の遺言を盾に取って兼家を抜き、やがて関白となった。このため、道隆の前途にも急に暗雲が広がりそうになった。が、天禄四年には従五位上に叙し、天延二年一月八日には藏人に補し、円融天皇に近侍することになった。高の内侍と近づきになる機会が出来たのである。

さて、「忘れじの」の歌の上の句は、忘れまいとあなたは誓うけれども将来もそのとおりであるとは限らないと懸念している。むろん当時は、道隆のほうが無意に自分を残して亡くなるなどとはゆめにも思っていなかったろう。しかし、結婚相手としてみると、将来性に黄色信号が点灯する状況がある。また、道隆には伊周より年長の男子（山の井の大納言道頼・内蔵頭頼親）、つまりその母の女性がいた。が、何より懸念されたのは栄花物語の様々のよろこびの巻に記す様子、多くの女性に懸想して「よろづにたはれたまひける」ありさまであったにちがいない。

やすらはで寝なましものをさ夜ふけてかたぶくまでの月を見しかな

小倉百人一首（五九）の赤染衛門の作とされる歌である。これは後拾遺和歌集卷十二恋二に入集した歌（六八〇）であり、詞書によると、姉妹に懸想文を贈り続けた挙句に、期待だけ持たせて結局通わなかった「少将」の道隆に贈った、代作の歌ということである。

道隆を「少将」に任じたのは天延二年十月十一日であり、貞元二年(九七七)一月まで在任したが、少将に任じたころのこととすれば、伊周が生まれた前後となるので全くの驚きである。これは道綱の母の、

嘆きつつ一人寝る夜の明くる間はいかに久しきものとかは知る⁷⁾

という小倉百人一首でも知られる歌の状況が思い出されるところである。蜻蛉日記の上巻によると、天曆九年(九五五)十月頃に詠んだよしだが、それは八月末に道綱を出産してほんの二ヶ月足らず後のことである。子の誕生を喜び合ったのも束の間、あろうことか兼家が妊娠中に町小路の女と交際していたことが九月に発覚、それで、訪ねて来た兼家を入れないで追い返したのであるが、その翌朝の、二人の関係が非常に危機的な状況となった時にこれを詠んで送ったのであった。

赤染衛門の姉妹には結局通わなかったのだから、おそらく道隆は高の内侍を道綱の母と同じようには悲しませなかったのだろうが、伊周の出産はあつても二人の関係は盤石でなく、「忘れじ」の歌も道綱の母と同じく危機より脱するため詠んだのかもしれない。

もとより男女の仲というものは、たとえ深くなつてもすれ違つたり飽きたりすることもあり、必ずしも長く続くとはかぎらない。例えば、小倉百人一首に梨壺の五人の一人清原元輔が詠んだ一首がある。

契りきなかたみに袖を絞りつつ末の松山波越さじとは

これは、古今和歌集卷二十の「君をおきてあだし心を我が持たば末の松山波も越えなむ」という有名な東歌(二〇九三三)を踏まえて詠んだ作である。古歌により皮肉をませた歌であると知られるが、後拾遺和歌集卷十四恋四の詞書(七七〇)には「心変はり侍りける女に、人に代はりて」とあつて、これは心変わりしたのが女の場合である。

合わせて、男が心変わりした場合も挙げておこう。後撰和歌集卷十一恋三に贈太政大臣(藤原時平)が他の女性へ

情が移ったことを伝えるために詠んだ歌（七五五）がある。

松山につらきながらも波越さむことはさすがに悲しきものを

これもやはり前引の東歌を踏まえて詠んでいるが、この別れの知らせを受けとったのは、三代集を代表する女性歌人の伊勢であった。

このように、本意に合わない別れであることを示すために永遠の愛を誓う古歌を利用することすらある。それが恋愛のあやなのだから、ただ「忘れじ」と言われただけであったなら、将来もその誓いが守られるとは、さすがに素直には思いかねたはずである。

どだい当時の結婚形態は通い婚である。そのうえ道隆はふらふらしていたというのであり、まるであてにならないのである。

もともと道隆としてもただその場かぎりの言葉と受けとられてもかまわないという程度の言葉だったのではなからうか。古今和歌集卷十四恋四に次のような詠み人知らずの和歌教材の歌（六八七）がある。

飛鳥川淵は瀬になる世なりとも思ひそめてむ人は忘れじ

前途多難の時期であるので、相手に思いが届くかを試したのではないだろうか。

つまり、「忘れじ」といった約束の言葉を「行く末まではかたければ」と受けとめることは、男女どちらの立場によっても正鵠を失してはいないということである。

ところが、高の内侍は「忘れじ」という言葉の空手形めいた偽装を瞬時に解いたばかりではなかった。その言葉を自分の歌の中に引き取り、二人の関係が続いている今日この時この場を永遠の瞬間に置き換えたのである。

これは道隆の言葉の真意を古歌より導けばこそ出来たことではなかったか。古今和歌集卷十八雑下に次の和歌教材

の歌(九三三)もある。

世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる

この古歌で切り返した、明日はどうなるかわからないという「今日」であったればこそ、高の内侍は道隆と、変わりやすい淵をも瀬をもともに渡って生きていくことになった。

このようにして結婚生活が始まり、高の内侍はやがて「殿の上」(枕草子)などと呼ばれるようになる。道隆はこの機転が利いた言葉の力、真剣で柔軟な対応力、自己実現のための行動力は格別だと思つたにちがいない。

さて、それでは、この結婚の扉を開いた高の内侍の歌を比較検討の材料として、式子内親王の「玉の緒よ」の歌の観念性について、整理してみよう。

第一点は、對他性に相違がみられることである。「玉の緒よ」の歌が題詠歌であるのに対して、「忘れじの」の歌には藤原道隆という相手があり、しかもその誓いの言葉を初句に引いているという特徴がある。そのため、誰あつての命かということが高の内侍の歌では明確である。

第二点は、「玉の緒よ絶えなば絶えぬ」であれ、「今日を限りの命ともがな」であれ、いずれも捨て身の姿勢であることである。但し、前者はそのことをいつそ放任するという態度であるのに対して、後者はそのことをいつそ希望するという態度の違いがある。それは、命や運命的なものへの考えの違い、無常感の差ともいえよう。なくなるのならばそれでよし、そのために任せようとするのが前者であるのに対して、たとえあつてなくても未来は自分が願ひ叶えるものだという覚悟、腹が据わっているのが後者だと思われる。

このほか、縁語の有無に注意を向ければ、技巧的であるのに対して直言的、また、観念的・抽象的であるのに対して具体的・現実的などといったこともいえ、さらには、両歌が新古今和歌集にも入集している点にも注意を向け

ると、新古今らしさとは何かについて、改めて理解を及ぼせることができよう。

新古今和歌集の歌風の第一は、余情の美である。また、絵画的・象徴的・物語的といった特徴があるとも教える。代表作として、巻四秋上の三夕の歌と呼ぶ和歌教材の三首より、須磨・明石の巻を念頭に置いたかとみられる藤原定家の歌（三六三）を挙げておく。

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ

この源氏物語取りの歌のほか、伊勢物語の物語教材である初冠の段・東下りの段・筒井筒の段等の歌や、後引のような伊勢物語取りの歌も、新古今和歌集に入集している。

こうした新古今らしさのうち、「忘れじ」の歌との相違を明らかにする象徴的・物語的と言える点について「玉の緒よ」の歌を検討しておきたい。

万葉集巻七の譬喩歌に「世の中は常かくのみか結びてし白玉の緒の絶ゆるく思へば」という、思いを寄せ合っていた美しい恋人との仲が途切れたことを嘆じた歌（一三二二）がある。このように「玉の緒」は「白玉の緒」であるので、ついでには物語教材で知られる、新古今和歌集巻八哀傷の在原業平の「白玉」の歌（八五二）を参考に供したい。

白玉か何ぞと人の問ひし時露とこたへて消なましものを

この歌のポイントは過去の助動詞「き」と反実仮想の助動詞「まし」である。この文法事項の確認を通じて、上の句から下の句にかけて、現実の体験が物語の理想に転じる脈絡を認め、愛する女と生きる希望を失った男の悲嘆、やるせなさを読み取る。現実の体験とはいっても、もとより歌物語の、深窓の女との逃避行のさなかのことであるが、この歌以外の物語の文章、つまり地の文は、実現しなかった未来が男の目にはもうすぐそこに見えていた、さもあつたかのように思わせる作用があるとともに、独詠歌であるほかない事情を過不足なく語っている。あの時にいっそ女

と死んでしまえばよかったという悔恨の念、孤独感が際立つのは、「白玉」「露」という言葉が女と見た希望、恋愛の理想化した極致、短い生涯を象徴的に表すためである。これと同じく、式子内親王の歌の「玉の緒」にも、理想化した恋愛に生きる魂の意を認めてよいのではないか。

また、「露」といえば、源氏物語の御法の巻に紫の上が「萩の上露」を詠む物語教材もあるが、その前に思い出しおきたいのは若菜の上巻の物語教材である。女三の宮との婚儀三日目、紫の上が「目に近くうつれば変はる世の中を行く末遠く頼みけるかな」などと書いた横に光源氏が「命こそ絶ゆとも絶えめ定めなき世の常ならぬ仲の契りを」と書いていた。背景にこの光源氏の歌を置くと、「玉の緒よ」の歌は、こうした恋愛観への高らかな共鳴であるともみられよう。こうした恋愛の理想化という物語的な面を、典型的な新古今らしさの一つとして押さえておきたい。

三、基本事項の確認―題詠歌ということ

三代集の時代の歌人が「忍ぶる恋」の意の歌を詠まなかったわけではない。これを歌題として詠むようになったのは平安時代の院政期のことである。

百首歌の嚆矢である堀河百首の恋の題にはまだ見えないが、永久百首の恋十首の初めの題としてあり、神祇伯源顕仲の次の歌（四二二）に始まる計七首が確認できる。

もの思ふと言はぬばかりは忍ぶれどいかかはすべき袖のしづくを

この顕仲の歌は、「忍ぶる恋」の歌を詠む時のお手本を平兼盛の小倉百人一首の歌「忍ぶれど色に出でにけりわが恋はものや思ふと人の問ふまで」に求め、下敷きにして詠んだ歌である。

永久百首の他の六首は次のような歌である。

藤原仲実

思ひ出は心ばかりに通はして衣の領うでにことな洩らしそ

源俊頼

奥山のくきがくれなる畑はたけつ守知られぬ恋に通ふころかな

源忠房

包みかね袖より玉の散る時は忍ぶ思ひや人は見るらむ

源兼昌

忍ぶともかかる涙にから衣あらはれぬべき心地こそすれ

常陸

知らじかし言ひし出でねばかくばかり忍ぶる恋に身を焦がすとは

大進

人知れず晴れるかたもなきものは忍ぶる恋のけぶりなりけり

これらの永久百首の歌からまとめると、そもそも「忍ぶる恋」とは、決して口外しないもので、深山の洞窟に住む畑の番人が里の女性を見初めでもするように胸の奥底に秘めているはずのものである。けれども、恋の思いというものは胸の中でいったん火が付いたら制限できない。涙になって知らず知らず体の外へ洩れ出てしまう。「な洩らしそ」と語気を強めて言い聞かせねばならないほど思いは募るといっているのである。これは恋の始発期の心、ときめきだつたりためらいだつたりする気持ちであり、誰にも止められない。

同じようなことは六百番歌合でも確認できる。岩波書店の『新日本古典文学大系』に久保田淳校注のテキストがあるので、この歌合では恋一の初恋の次に「忍ぶる恋」という題を置く。いくつか例を挙げて確認しておこう。

次の七番左の女房（藤原良経）の歌（六一三）は、恋愛当初の涙を初時雨の隠喩で表現している。

洩らすなよ雲ある峰の初時雨木の葉は下に色変はるとも

初時雨が木の葉に降りそいで紅葉するのは仕方がないにしても、涙で恋心が洩れてはいけなく強く詠んでいる。

この他には菽蓮の「思ひ堰く心の底の夢ならば覚めてのちも人に語らじ」という十番の右の歌（六一〇）、藤原定家の「氷あるみるめなぎさのたぐひかな上堰く袖の下のさざ波」という十一番の左の歌（六二二）などがあり、やはり心中の恋愛感情を堰き止めることを詠んでいる。

そもそも、「忍ぶる恋」それ自体は後撰和歌集卷九恋一に、

世の中に忍ぶる恋のわびしきは逢ひてののちの逢はぬなりけり

という題知らずの歌（五六四）があるとおりで、恋愛の始発期に限らない。けれども、恋の題をその進展により細分するにあたって始発期のこととされ、前にみたような、表面上は恋していると見せないが、胸の内では恋愛の葛藤が抑えがたく生じたという構造の歌を詠むのが基本になった。次の六百番歌合九番左の顕昭の歌（六一七）は「言はで後悔もぞあるといへり。いささか心賢きにつきて」勝ちとされたが、まさにこの基本のキを押さえている歌である。

憂き身とてさのみはいかがつつむべき言はで悔しきこともこそあれ

十二番左の藤原有家の歌（六二三）の次の歌も同様である。

忍びつつこの世尽きなば思ふこと苔の下にやともに朽ちなむ

これも「苔の下にやなどといへる、心深きに似たるべし」と判ぜられ勝ちになっている。

このように、「忍ぶる恋」の基本構造に則した歌は、「恋にはわりなく浅からぬよし」を詠むべしという題詠歌に対する評価の観点から、好評価が受けやすくなるのである。

さて、「玉の緒よ」の歌についても「忍ぶる恋」という題を詠んだ、これらの先行歌と共通する点が確認できる。恋愛の始発期であることを示す第三句の「長らへば」という仮定の条件句、そして初句と二句の強い調子それ自体も、まさにこの題の題詠歌らしい表現と言える。

とはいえ、こうして先行の題詠歌を見てくると、「玉の緒よ」の歌には、他と違うところがあることもまた明白である。特に第二句の「絶えなば絶えね」という言葉に注目されたい。これは「ことな洩らしそ」「洩らすなよ」といった禁句とは明らかに位相が異なり、自動詞の命令形の放任法である。つまり、本当に禁じる意志があるのかどうかを疑わせかねないくらいのも、非常に危うい表現になっているわけである。恋愛始発期という題の約束事についても、第二句に「なば」、第三句に「長らへば」と、二つの仮定条件の表現を続けてその期間を揺り動かしている。「未だ見ざる恋」から「見れども逢はぬ恋」などといった、恋愛の先々の段階にまでいっきに思念を広げるような構えを見せているのである。こうした恋の他の題の状況にも割り込んでいきそうなることを、題詠歌ならではのアクロバチックな行為、型破りなところと先ず認めたい。初句の「玉の緒」という歌語すらもが、恋愛を終わりまで取り上げるのかと思わせるような破天荒ぶりである。

それでも、これが「忍ぶる恋」の題詠歌としてかろうじて成り立っているのは第二句の「絶えなば絶えね」という言葉による。「玉の緒」「玉」という歌語それ自体にあっけなくなるものという思念が染みついていることと、第三句以下が特にその歌語的な意味合いを十分に補うことにより、「玉の緒」という歌語を中心にその物語的・象徴的な思念を掻き立てる文が成立する。このことにより、禁句としてはそれ自体危うい表現であることから一転、必然的な

消滅に任せてかまわないという、放任と抑圧の葛藤の激しい情念を表し、恋愛始発期の「忍ぶる恋」の歌になつてゐるのである。

まず題詠歌としての基本を押さえることにより、「玉の緒よ」の歌が型破りな題詠歌であつたこと、それは特に、恋愛の段階を定めた恋の題の約束事により認められることを、ここではまとめておきたい。

四、発展—家集の検討

では次に、式子内親王の家集の「忍ぶる恋」の歌を取りあげてみたい。

式子内親王は、歌人としては、新古今時代の三才女の一人として古典文学史上にその名を記すが、新古今和歌集では、宮内卿、俊成卿女よりも多い四十九首が入集し、女性歌人の代表的な存在である。

家集には、正治初度百首を含む三つの百首歌と「勅撰に入ると雖も家集に見えざる歌」からなる式子内親王集があり、新編国歌大観所収の家集（底本は宮内庁書陵部蔵萱齋院御集）には「玉の緒よ」の歌（三一九）を含む三百七十四首を収めている。ここでは、岩波書店の日本古典文学大系の平安鎌倉私家集に久松潜一・國島章江校注のテキストがあるので、それによつて歌番号を示しつつ検討することにした。

さて、家集より次の和歌教材の一首（三一九）をまず取りあげてみたい。

忘れてはうち嘆かるる夕べかな我のみ知りて過ぐる月日を

新古今和歌集の巻十一では式子内親王の「忍ぶる恋」の歌が三首続くが、「玉の緒よ」の歌の次にこの「忘れては」の歌（一〇三五）がある。

「忘れては」の歌は三句切れで倒置法を用いているので、「我のみ知りて過ぐる月日」が「忘れ」る事柄である。「忍ぶる恋」の題意は、副助詞「のみ」が表し、恋人に逢いたいという思いを自分一人の胸に仕舞い込んできたと詠んでいる。胸に秘めたままもう長い間辛抱してきたというのに、ふつうならばこれから逢瀬の時間だという夕方になると、逢うことなどないとわかっているはずなのに、つい秘め事であることを忘れる。そして、今日もまた逢いたいのに逢えないと寂しく思つてはふと嘆きのため息を漏らしてしまうといった意の歌である。

この「我のみ知りて」という表現には本になつた歌として古今和歌集卷十二恋二の紀貫之の歌（六〇六）がある。
人知れぬ思ひのみこそわびしけれ我が嘆きをば我のみぞ知る

貫之の歌は、恋しくてならない意中の人に自分の気持ちをわかしてもらえない秘め恋の気持ちほど慰めもなく苦しいものはない、胸中の恋慕の情のやりきれなさ、それをただ私だけが知っているほかない孤独感、つらさはたまらないといった意。この歌を踏まえ、宵闇に沈んでゆく夕べという時間に限つてそのつらさを際立たせた点に特徴がある。これは、男女が逢う時間の始まりが夕べであること、女を訪ねる男の立場で詠んでいることを合わせて理解したい。

新古今和歌集では、「忍ぶる恋」を題として「玉の緒よ」と「忘れては」の二首が並ぶので、恋心を秘める力の緊張と弛緩とがきわやかに対照させられる。後者の経験があることにより前者の弱るといふ予断に説得力が加わるといへ、また、前者の抑圧があることにより後者の執心が強調されるともいえる。これは、互いの意を深め合う相補的な配列とみられるが、この二首がもともと連作としてあつたかどうかはわからない。家集では「勅撰に入ると雖も家集に見えざる歌」、日本古典文学大系の校注者の整理にいう「D歌群」の歌に該当するためである。

さて次に、これも「勅撰に入ると雖も家集に見えざる歌」より続後撰和歌集所収の「忍ぶる恋」の歌（三三六）を取り上げたい。卷十一恋一の一（六六八）で、勅撰集はこれに直接の詞書を持たないが、前の歌（六六四）の詞書

に「同じ心を」、その前の歌(六六三)の詞書に「洞院撰政家の百首の歌に忍ぶる恋」とあることによって、「忍ぶる恋」を詠んだとみられる歌である。

君ゆゑといふ名は立てじ消え果てむ夜半の煙の末までも見よ

「忍ぶる恋」の意を、二句切れで、命令形も用いた強い調子で詠むところは「玉の緒よ」の歌と相通ずる作である。歌意は、あなたのためだという噂は立てまい。けれども、消えてなくなろうとする夜空の煙は、私があなたを火のように恋いこがれて立てたのだから、あなただけは最後まで見られるものなら見るがよい。この煙の比喻は永久百首の大進の歌にもあつたが、新古今和歌集巻十羈旅の業平の歌(九〇三)で、伊勢物語の物語教材としても知られる「信濃なる浅間の岳に立つ煙をちこち人の見やは咎めむ」という一首などにも確かめられる表現である。同じく思いの火の激しさをいう「煙」ではあるが、これは「夜半の」煙とすることで人目を避けたものになっている。

家集に確認できる「忍ぶる恋」と題にある歌は以上の三首である。家集には恋の歌が五十一首ほどあるが、その中には題に恋とあるのみであっても、内容的には「忍ぶる恋」の類に入ると思われる歌がある。

我が恋は知る人もなし堰く床の涙もらすなつげの小枕^せ

これは、正治初度百首の恋の題の一首(二七四)であるが、内容的に明らかにそれとわかる作であり、新古今和歌集巻十一に、前掲の「忘れては」の次に挙がる、「忍ぶる恋」の三首目(一〇三六)である。

一方、「恋ひ恋ひてそなたになびく煙あらばいひし契りの果てとながめよ」という恋の歌(八五)は、過去の助動詞により、「見れども逢はぬ恋」の、待った恨みを表した作とみられるが、前掲の「君ゆゑと」の歌と同じく煙を詠んでもいるので、これは前掲の「忍ぶる恋のわびしき」を詠んだ後撰和歌集の歌に近い。新古今和歌集巻十二恋二をみると、「見れども逢はぬ恋」でも「忍ぶる恋」でもある歌が数首あるが、これはそうした一首と考えられる。

では、このようにして家集よりさらに五首取り上げてみたい。

入りしより身をこそ碎け浅からずしのぶの山の岩のかげ道

一首目は、古今和歌六帖第二の「山」に「しのぶ山忍びに越えむ道もがな人の心の奥も見るべく」とある歌（八六六）などにより知られる陸奥国の歌枕を詠んだ、百首歌の恋の一首（一一一）である。

古今和歌六帖のしのぶ山の歌は、新勅撰和歌集卷十五恋五に在原業平の作（九四五）として入集し、伊勢物語の十五段では、不義の仲となった東国の女に、その誠意を見るために贈った歌である。つまり、「見れども逢はぬ」恋の「忍ぶ」思いを詠んだ歌である。

一方、式子内親王の「しのぶの山」の歌は、入山するやいなや身を粉碎し、「言は（まほしき）恋の思いも「言はず」に終わる、恋愛始発期の「忍ぶる恋」の歌になっている。「玉の緒よ」の歌と同じく、命令形の放任法を用いた二句切れであり、「浅からず」と見透かす全知的な視点も型破りであるが、「岩」に掛けた「言は」の掛詞が効果的に働き、「忍ぶる恋」の題詠歌として成立している。伊勢物語の歌を本歌としてしのぶ山の奥の道を取り、人の心ではなく身のことに変え、「忍ぶる恋」の題詠歌として詠んだ作と考えられる。

ほのかにもあはれはかけよ思ひ草下葉にまがふつゆも洩らさじ

この二首目（七二）は「つゆも漏らさじ」と誓う、「忍ぶる恋」の歌である。これは源氏物語取りの歌で、本歌は帯木の巻の「山がつの垣ほ荒るとも折々にあはれはかけよ撫子の露」という一首である。この本歌は、勢威盛んな右大臣家は怖いので、人に見聞きされることは絶対に避けたいとは思うものの、やはり頭中将には父としての愛情を撫子（＝玉鬢）に少しでも分けてほしいという、夕顔の母心を表した一首である。本歌取りにあたっては、「撫子」を「思ひ草」に変えているが、この「思ひ草」は、女郎花ではなく、「道の辺の尾花が下の思ひ草いまさらなに何もなのか思はむ」

という万葉集卷十の歌(二二七〇)に詠まれたそれである。尾花、花薄を袖に見立てる常套を踏まえての工夫と考えられる。すなわち、「思ひ草」以下は袖で涙をしっかりと包み隠して決して洩らさないつもりだという意。この意によって命令形の放任法が成立し、「見れども逢はぬ恋」の本歌より離れた、「忍ぶる恋」の歌である。

かくとだに岩垣沼の濤標知る人なみにくづる袖かな

この三首目(二七二)は、晩年の正治初度百首の恋の歌である。「かくとだにいは」で始まる「忍ぶる恋」の歌には、詞花和歌集卷七恋上の隆恵法師の歌「かくとだにいははかなく恋ひ死なばやがて知られぬ身とやなりなむ」という歌(一八九)や、久安百首の待賢門院堀河の歌「かくとだにいはぬにしげき乱れ蘆のいかなる節に知らせそめまし」という歌(一〇六二)もある。これらの初句を解するにあたっては、指示語の「しか」と「かく」の違いにまず留意して、近づきになりたいという思いが強くなることを理解したいが、岩で囲まれた沼の濤標は、「知る」を導く序詞であるとともに「言は」ないで思いを胸に秘め、身を滅ぼそうとしている「忍ぶる恋」の様を暗に表している。なお、新古今和歌集卷十二恋二には後徳大寺実定の「かくとだに思ふ心を岩瀬山下ゆく水の草がくれつつ」という歌(二〇八八)があるが、こちらは「見れども逢はぬ恋」のそれである。

逢ふことは遠つの浜の岩躑躅いはでや朽ちむそむる心を

この四首目(二七七)は、正治初度百首の恋の一首で、「遠つの浜」は、歌枕であるらしいが、どこの国にあるかは不明である。序詞は古今和歌六帖第六「岩躑躅」の「山越えてとほつの浜の岩躑躅我がくるまでにふふみてありまて」という歌(四三一一)より借用している。この本歌は万葉歌(一一八八)でもあって、「ふふみてありまて」は、咲くのは恋人が来てからにしてそれまでは蕾のまままで待っていてほしいという意。本歌取りにあたり、「逢ふこと」が「遠」いとし、また、躑躅の色の縁語「染むる」に思いそめる意の「初むる」を掛けた掛詞も用いることで、「忍

ぶる恋」の歌としている。

袖の色は人の問ふまでなりもせよ深き思ひを君し頼まば

五首目（三〇六）は、千載和歌集卷十二恋二の歌（七四五）で、例の平兼盛の歌を踏まえて詠んだ一首。三句切れの倒置法で仮定の条件を最後に示し、「忍ぶる恋」の歌としている。作者には「深き思」いがあって、それは袖に緋色（血の涙の色）となって現われる恐れがある。もしも「君」がそれに気付いて誠意を寄せてくれるのであれば、いっそのこと、その袖の色は「ものや思ふ」と人が尋ねるくらいにまで濃くなればよいと思うが、これは仮定の上でのことであって、そのようなことには決してすまいというのである。ふつうならば恐れて避けることなのにいきなり居直っているポーズに驚かされるが、これも型破りな「忍ぶる恋」の歌である。

この他に、源氏物語取りの諧謔の歌で、包み隠そうとしてもつい漏れてしまう「忍ぶる恋」を詠んだ「我が袖は濡るるばかりは包みしに末摘花はいかさまにせむ」という歌（二八〇）等もあるが、以上に止めておきたい。

さて、このように、式子内親王の家集の恋の歌の中には「忍ぶる恋」の歌が比較的顕著に認められるので、これは式子内親王の恋歌の傾向の一つであると言つてかまわない。恋の歌のほとんどは百首歌の中の恋の題詠歌であり、恋の題には他の題もあるのに「忍ぶる恋」の歌が多い点も、はつきりとした傾向の一つと言える。

前記したとおり、恋の題の一つである「忍ぶる恋」を詠んだ歌には、恋愛始発期のそれを詠む歌と、後撰和歌集の「忍ぶる恋」の歌のような、「見れども逢はぬ恋」のそれを詠む歌とがあるが、式子内親王の「忍ぶる恋」を詠んだ歌には、前者とも後者とも考えられる歌がある。表現には禁句的な言葉や命令形の放任法が目立ち、「しのぶの山」や「玉の緒よ」の歌が典型的にそうであるように、「忍ぶる恋」の題詠歌としては型破りであり、意表を突くところがある。歌語として培われてきた想念を膨らませつつも、抑制する力が非常に強く、また、瞬間的であり、破滅的である。こ

れは、理屈を言えば、内に秘めた思いが大きいと、それを抑えていられる時間がそのぶん短くなり、浮き名を流すリスクが高まるのを避けるためであるということになるが、歌人の式子内親王は、「忍ぶる恋」の題意を時間につれて上がり下がりする恋愛の熱量曲線を積分して一気にその総和量を取ることだと直観的に理解しているので、歌の表現にその形跡が現れるのである。

ところで、新古今和歌集卷十二恋二に、式子内親王の和歌の師である藤原俊成が詠んだ、

思ひあまりそなたの空をながむれば霞を分けて春雨ぞ降る

という歌(一一〇七)がある。この和歌教材の一首は、新古今和歌集の詞書には「雨の降る日、女に遣はしける」とあるが、俊成の家集長秋詠藻の詞書には「春のころ、忍ぶることある女のもとに遣はしける」とあるので取り上げてみたい。

この歌には本歌があり、詞花和歌集卷十雑下の藤原忠通の「思ひかねそなたの空をながむればただ山の端にかかる白雲」という一首(三八一)より上の句を取り、白雲を春霞に変えて下の句を作っている。この歌が「忍ぶることある女」への贈歌として成り立つのは、和歌では一般に霞が隔てるもの、隠すものを表すためである。つまり、この「霞」は「忍ぶることある女」の思いの火が発した煙霞に見立てられているのである。例えば、前出の「君ゆゑと言ふ名は立てじ消え果てむ夜半の煙の末までも見よ」という式子内親王の歌、また特に題詠の「忍ぶる恋」の歌に先鞭をつけた永久百首の「人知れず晴れくるかたのなきものは忍ぶる恋の煙なりけり」という大進の歌もあった。こうした「忍ぶる恋」の歌を詠む女性を思つて詠んだのが俊成のこの歌である。

俊成の歌は、逢いたいという思いが募りに募り、やりきれなくなつてあなたの住んでいる家の方角の空を仰ぎ見たところ、春霞のかかった空より春雨が降り出したように、私の目はあなたを思う涙でかき曇つたのだつたといった意

であるが、注目したいのはこの春霞を「分けて」という表現である。これはまさに、春霞を涙の瞬間で微分してその時の最大値を春雨に取ったということである。さすがは式子内親王の和歌の師だと思わせる一首である。

五、更なる発展―他の歌人の同題の歌との比較

ところで、新古今和歌集の三才女の一人である俊成卿女は、新古今和歌集の撰者の一人である大納言源通具の室となり、具定を正治二年（一一二〇）に生んだので、洞院撰政家の百首には「三位の侍従の母」の名で歌を詠進している。この百首歌は洞院撰政藤原教実が「関白左大臣」であった寛喜三年（一一三一）七月より翌年の貞永元年十月までに成ったとみられるが、その中には「忍ぶる恋」を題として詠んだ歌が五首（一〇七四〜八）あり、さらに家集には、建仁二年（一一二二）の影供歌合で「忍ぶる恋」を題として詠んだ一首（二三四）がある。これらの六首は、前節の式子内親王の家集より取りあげた歌と比べてみると、作風の違いが歴然とする。ついてはこれも、岩波書店の日本文学大系の平安鎌倉私家集に久松潜一校注のテキストがあるので、それによって歌番号を付す。

はかなしやしのぶの山の夕煙消えなむ空のあとの白雲

この一首（二三四）は、前記の歌枕しのぶ山を詠んだ「忍ぶる恋」の歌で、「夕煙」を詠んだ点も特徴的である。夕煙は夕方にあがる煮炊きの煙のこともいうが、これを伊勢物語の高安の女のように思うと見当違いになる。恋に身を焦がす女の思いの火が空に真っ赤に燃え映った夕焼けの空であり、それが消えるとやがて夜空の月を隠す白雲になるといふ情景は妖艶である。対照法を引き立てる「消えなむ」という表現も初句の詠嘆と響き合っている。

俊成卿女は建仁二年の影供歌合でも「忍ぶる恋」の題で「しのぶの山」を取り上げ、

人知れず思ひしのぶの山風に時ぞともなき露ぞこぼるる

と詠んだが、これ(二四〇)は嵐のような激しい感情に耐えられずに涙する様子である。

この二首はいずれも「入りしより身をこそ砕け」と詠んだ式子内親王の歌とは明らかに異なる点で注目される。

いかにせむ時雨るる野辺野イの思ひ草下葉にむすぶ露の乱れを

「思ひ草」を詠んだこの歌(二三五)も、前の式子内親王の歌とは詠みかたが異なり、途方に暮れるほかない「忍ぶる恋」の嘆きの涙を詠んでいる。

うらもなくかげも宿さじ堰く袖の涙の色を月もこそ問へ

「堰く袖」を詠んだ一首(二三六)は、あの兼盛の歌の類型に属する詠であるという点で、「袖の色は人の問ふまでなりもせよ」と詠んだ式子内親王の歌と同じである。初句は形容詞「うらなし」の連用形の語幹と活用語尾の間に強意の助詞「も」が入った表現で、心内に思っていることを隠せないという意である。その「うら」に「袖」の縁語の「裏」を掛け、もう心の内を隠しようもないので、いつそ裏地もなくなり涙をためて月影を映すこともできないくらいに泣こう、袖が涙を堰き止めて血の色となるのを、月だけでなく人も問いただすと困ることになるのでといった意を詠んだ歌である。これもエスカレートした情況で思いの深さを表すが、相対的に止めようとする力が弱い。

しきしのび朽ちなむ床の跡までもぬれし枕の露も漏らすな

「枕」を詠んだこの歌(二三七)は、久安百首で俊成が詠んだ「しきしのぶ床だに絶えぬ涙にも恋は朽ちせぬものにぞありける」という恋の歌(八八〇)を下敷きにしている。「しきしのぶ」という語は、源俊頼の散木奇歌集の釈教歌「風ふけばみだのみぎりにちる花をのりのむしろとしきしのぶかな」という一首(八六九)にみえるが、それ以前は使われていない比較的珍しい語で、しきりに懐かしんで思いを寄せるといった意であるが、俊成卿女の歌でも「床」

の縁語で「敷く」を掛けている。勿論「枕」は式子内親王も詠んだ「つげの小枕」である。俊成卿女の歌は、恋い忍んでは流す涙で朽ちる床の痕跡すらも、濡れた枕が決して人に洩らし告げることがあつてはならないという意の「忍ぶる恋」の歌である。これも式子内親王の「堰く床の涙」の歌よりも床のべの情況が細かく詠まれている。

わきかへり下にぞむせぶ名取川瀬々の岩間の水の白波

この歌（一三八）が詠んだ陸奥国の「名取川」は有名になる、噂になることについて詠むのがふつうで、「忍ぶる恋」の歌に詠むのは意外性がある。「名取川瀬々の」とあるのは「名取川瀬々の埋もれ木あらはればいかにせむとか逢ひ見初めけむ」という古今和歌集卷十三恋三の歌（六五〇）を本歌取りしたのだが、「忍ぶる恋」の題に合わせて「言はず」「知らず」という語が響くように言葉を選んでいいる。全体が叙景歌のようでありながら、守秘の態度と反発、欲望を表す掛詞の「言は（ず／む）」「見（ず／む）」「知ら（ず／む）」を導くという技巧を用いる。岩にぶつかり波飛沫をあげては川底に音を轟かせてもぐりこみ、岩と岩の間を白波立てて勢いよく流れて行く川の水のような、理性と欲望とが荒れ狂う煩悶の隠喩である。この絵画的な表現は前の式子内親王の歌にはなかったものである。

以上、俊成卿女の家集より「忍ぶる恋」の題詠歌を引き、式子内親王の歌と比較検討して各各の作風を確かめた。俊成卿女の歌としてよく知られるのは新古今和歌集卷三夏の歌（二四五）で、

橘の匂ふあたりのうたたねは夢も昔の袖の香ぞする

という和歌教材の一首である。これは伊勢物語の歌でもある古今和歌集卷三夏の「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」という和歌教材の歌（一三九）を本歌取りした作で、あでやかであり、物語でもある。俊成卿女の「忍ぶる恋」の歌にもこれと同様の特色が見える。また、式子内親王の歌と比較検討すると、特色の第一が絵画的であるとわかる。名取川の歌はその特色が典型的に現れた作である。白雲がかかり嵐が吹くしのぶ山の歌は同じ歌枕

を「入りしより身をこそ砕け」と詠んだ式子内親王の歌とこの点でも顕著な異なりがあった。

特色の第二は情況のエスカレートである。夕煙より白雲へ空の景物が移り変わったしのぶ山の歌もそうであるが、事態の推移を観察して細かく描き取ることによって深さを出す傾向がある。袖に包んで隠す思いの隠喩である「思ひ草」を詠んだ歌も、式子内親王の歌とは異なり、草に露が置く情況のほうをより細かく描き取っていた。また、詠みふるされてきた、兼盛の「しのぶれど色に出でにけり」の歌の類型に属する作でも、「袖の色は人の問ふまでなりもせよ」と詠んだ式子内親王の放任ぶりとは異なり、紅涙で袖の「うら」もなくなるまでの情況を細かく詠んでいる。

特色の第三は題意の詠み方である。洞院撰政治家百首でも恋の題の初めに「忍ぶる恋」の題があるが、この頃にはもう恋愛の始発期の題であるとか、まだ誰も恋心に気付いていないなどといった題意は勿論歌人たちの了解事項であった。また、俊成卿女はすでにベテランの歌人であり、題詠歌を詠む練度も上がっていた。このことは、しのぶ山の二首を比べるとよくわかる。建仁二年の歌には「人知れず思ひしのぶ」と題意を繰り返すところがあるが、洞院撰政治家百首では「はかなしや」といきなり詠んでいる。

さらには、この百首の三十年前に式子内親王が崩じているので、前掲の式子内親王の歌は先行歌として踏まえることも可能だった。「堰く床」の「枕」を同じく取り上げるにしても、「つげの小枕」であることは当然わかるとして単に「枕」とするなど、重ねて略せるところは略し、その分細かく床のべを詠み描くことができたのである。式子内親王の「忍ぶる恋」の歌は型破りな題詠歌であったが、俊成卿女にとってそれはもう学ぶべき歌であった。

以上、両者の比較検討により特色として指摘できることについては、新古今和歌集以来の幽玄に細やかさを加えて中世的な美を作りあげたとされる京極派の歌人たちの作風につながる特色が指摘できたところまでで一区切りとしておきたい。式子内親王が亡くなったのは源頼家が鎌倉幕府の二代將軍になる前年のことであり、まだそのような中世

的な美のスタイルは確立していなかった。

六、応用―他の教授法の見直し

村上天皇の後宮の齋宮女御徽子女王や源氏物語の冷泉院の秋好中宮のように齋宮を経て入内した例はともかく、元齋宮と臣下の恋愛となると非常に厳しい目が注がれ、また、物語のようにも語られた。

このことは小倉百人一首の左京大夫道雅が詠んだ一首（六三）により知られる。

今はただ思ひ絶えなむとばかりを人づてならで言ふよしもがな

歌を詠んだ事情は後拾遺和歌集卷十三恋三の歌（七五〇）の詞書に次のようにある。

伊勢の齋宮いつきのみやわたりよりまかりのぼりてはべりける人に、忍びて通ひけることを、おほやけも聞こし召して、守りめなどつけさせたまひて、忍びにも通はずなりにければ、詠みはべりける

この当子内親王の「密奸」（一代要記）については栄花物語の卷十二玉のむら菊と卷十三ゆふしでの巻に詳しい。当然このことで想起されたのは「かの在五中将の、心の闇に惑ひにき夢現とは世人定めよ」など詠みたりしこと、すなわち伊勢物語の物語教材、狩の使いの段の話である。在原業平が「かきくらす」の歌を詠んだ事情については、古今和歌集卷十三恋三の歌（六四五・六）の詞書に次のようにある。

業平の朝臣の、伊勢国にまかりたりける時、齋宮なりける人に、いとみそかに逢ひて、またの朝に、人やるすべなくて、思ひをりけるあひだに、女のもとよりおこせたりける

業平は齋宮のもとより「君や来し我や行きけむおもほえず夢か現か寝てか覚めてか」という歌が届いたので返歌した

のであった。

栄花物語には業平のこれは「まだまことの齋宮にておはせし折のこと」であるけれども、当子内親王は「前の齋宮と聞こえさすれば、あながちに怖ろしかるべきことにもあら」ずともある。しかし、これは中将の道雅の側に立った見方をあえてしているのであり、続けて、醜聞となったことを父の三条院は決して許さなかったと記している。道雅も決してあきらめず歌を贈り続けたので当子内親王は結局自ら尼になってしまった。栄花物語は、その出家は崩御の後のことであるのに、院が出家について「あへなん、めざましかりつるよりは」と思ったと記し、噂になった後に三条院が娘の将来を心配して頭を悩ませていたことにしている。

当然ながら式子内親王もこの話は知っていたにちがいない。勿論恋愛の醜聞になることは誰もみな決して望まないが、歌人としてはどのように思っていただろうか。当時の歌人は、当子内親王の話も「あはれに昔の物語に似たる御ことどもなり」と思うような感性で理解していたのではないだろうか。

新古今和歌集巻二春下には伊勢物語の四十五段の「暮れがたき夏の日ぐらしながむればそのこととなくものぞ悲しき」という歌を踏まえて季節を改めた、

花は散りその色となくながむればむなしき空に春雨ぞ降る

という和歌教材の一首(一四九)があり、巻三夏にも伊勢物語の三十二段の「いにしへのしづのをだまき繰り返し昔を今になすよしもがな」という歌を引いた、

返り来ぬ昔を今と思ひ寝の夢の枕にほふ橘

という和歌教材の一首(二四〇)がある。このように、式子内親王のような歌人にとって伊勢物語は詠作上のひらめきを得る良材であった。

「玉の緒よ」のような歌を詠作するのに必要な素養は、このように物語上の人間、説話的な歌人の出来事に寄り添い、古歌を理解することで身につける。題詠の場ではそれを惜しみなく發揮することが求められていたのである。

ところで、後撰和歌集卷十恋二に、紀貫之の次のような歌（六四六）がある。

玉の緒のたえて短き命もて年月長き恋もするかな

詞書には「年ひさしく通はしはべりける人に遣はしける」とあり、長年来交際を続けてきた女性に詠んだ歌である。

この貫之の歌と「玉の緒よ」の歌の関係について、尚学図書『百人一首の手帖』の解説（谷知子）は、この「古歌の影響」を指摘し、久保田淳校注の角川文庫（二〇〇七年初版）の脚注もこれを「意識しているか」と注する。

前掲の「逢ふことや涙の玉の緒なるらむ」という平公誠の歌と比べると、貫之の歌とは共通の歌語の数も多いので確かに公誠の歌よりも近いと思われる。平公誠の歌も「しばし絶ゆれば落ちて乱る」とある中の「しばし」という語に、そもそも人生は短いと嘆く観点により、逢う時間を惜しむ気持ちを込めたとみられるが、「短き命」を「玉の緒」に喩える表現までは借用していない。

勿論、貫之の歌を透かし彫りにして歌題の「忍ぶる恋」の意を残せば式子内親王の歌になるといった単純なことではない。「本歌取り」については、貫之への女の返歌を本歌取りしたとでもいうとよいか。前記したとおり光源氏の歌も意識下にあっただかと思われる。

この影響の有無を考えるためには改めて題詠歌として本質的に考えることが必要である。前記したとおり「忍ぶる恋」の歌には二種類ある。恋愛始発期のそれと「逢ひての後の逢はぬ」それとである。貫之の歌が「見れども逢はぬ恋」の歌であることは明らかで、これにより作る返歌は後者のそれになる。しかしそれでは恋愛始発期という約束事に合わない。一方、公誠の歌も詞花和歌集の恋下の配列では「見れども逢はぬ恋」の範疇に入るようである。撰者は

助動詞「らむ」を原因推量の意と解し、作者は経験にもとづいて逢うことが涙の玉をつなぎとめる緒だからだろうか
と詠んだと考えて配列したとみられる。但し、配列を離れて改めて考えると、助動詞「らむ」の意を現在の婉曲とす
れば、この歌は逢う前のためらい、逢って涙することへの怖れを詠んだとも解せられる。つまり、もともと助動詞の
「らむ」により人生の年輪に堪えるような深さを持つ歌であつたので「見れども逢はぬ恋」の歌として配列可能だっ
たのである。

「玉の緒よ」の歌が「忍ぶる恋」の題詠歌として成立するには貫之の歌の影響だけでは足りず、公誠の歌を足して
もやはり足りない。その「玉の緒」という語は「短き命」か「逢ふこと」か「涙」かのいずれかではなく、命ははか
なく涙は人生に付き物だが逢うことは恋愛する人の命そのものだともいった恋愛観にもとづく恋そのものを表す言
葉である。このように恋愛についてたちまちに積分して表現できる能力を、「忍ぶる恋」の歌を得意とした歌人が身
につけた個性として再確認しておきたい。

七、まとめにかえて—定家のこと

金春禅竹作と伝わる謡曲定家の前半には、蔦葛の絡まる石塔の前で、旅の僧が所の女より式子内親王と定家との深
い関係を聞くところがある。いわく、式子内親王が賀茂の斎院を退下したのち定家卿が忍び忍びに通って深い仲となっ
たが、亡くなったのちもその互いの執心で、式子内親王の石塔に定家葛が絡まっているのだという⁹⁾。そして、僧に読
経をあげてもらうために女はさらに話し続けるのだが、引き歌を散りばめたその詞章の中に「玉の緒よ」の歌を引用
している。

「シテ」いまは玉の緒よ、絶えなば絶えね長らへば、「地」忍ぶることの弱るなる、心の秋の花すすき、穗に出で初めし契りとて、また離れがれの中となりて、「シテ」昔は物を思はざりし、「地」後の心ぞ果てしもなき

「玉の緒よ」の歌に続く「心の秋の」という言葉は、紀貫之の「初雁の鳴きこそ渡れ世の中の人の心の秋し憂ければ」という古今和歌集卷十五恋五の歌（八〇四）などに見える語で、男女の心変わりを憂える気持ちについていう。秋の七草の一つ「花すすき」は、古今和歌集卷四秋上の在原棟梁の歌（二四三）に「秋の野の草の袂か花すすき穗に出でて招く袖と見ゆらむ」とあるように、招く袖のような姿により女性の隠喩になる語。堀河百首には大江匡房の「花すすきほに出でて招くころしもぞ過ぎ行く秋はとまらざりける」という歌（六二六）もあり、久安百首にも藤原教長の「穗に出でて招くとならば花すすき過ぎ行く秋をえやはとどめぬ」という歌（二四九）がある。このように「ほに出づ」には公然のこととなる意もあるので、恋愛が次の段階に進んだことを表す。ところが、「また離れがれ」の段階、すなわち「見れども逢はぬ恋」となり、さらに先の段階へと詞章は繋がっていく。「昔は物を思はざりし」云々は小倉百人一首の藤原敦忠の歌（四三）を引いている。

逢ひ見ての後の心にくらぶれば昔はものを思はざりけり

この拾遺和歌集卷十二恋二の歌（七一〇）については、解釈が二説あって、拾遺抄卷七の詞書（二五七）に従うと、「はじめて女のもとにまかりて又の朝につかはしける」とあるので最初の後朝の歌であるが、拾遺和歌集では「題知らず」であり、謡曲はこれを「見れども逢はぬ恋」ととる考えに従ったものとみられる。

このように、謡曲「定家」の詞章は、「忍ぶる恋」に始まり、逢って、逢わなくなり、死してなお執する、恋の人生を生きた女の思いを表出した一首として所の女の語りの最初に引用する。勿論、恋の題の順に従ったことである。また、読経による救済・滅罪悔悟を願う場面の詞章の一部として「絶えなば絶えね」という歌がふさわしかったとも

みられる。成仏すべき女の魂として表わし出すに足る、迫真の歌と認めた一首といえようか。「玉の緒よ」の歌は「忍ぶる恋」の型破りな題詠歌であったので、謡曲の作者もこれを型破りに利用できたのである。

ところで、新古今和歌集の「忍ぶる恋」を詠んだ式子内親王の三首は、定家の八代抄では異なる巻に見え、「玉の緒よ」の歌は卷十二恋二(九七七)、「我のみ知りて過ぐる月日を」という歌と正治初度百首の「我が恋は知る人もなし」という歌は卷十一恋一(八六六・七)にある。岩波書店の岩波文庫に樋口芳麻呂・後藤重郎校注のテキストがあるので歌番号を示しつつ最後に検討しておきたい。

八代抄の恋の部の歌も恋愛の段階等に応じて歌を配列しているが、卷十一では式子内親王の二首の後に小倉百人一首(三九)の源等の歌(八六八)がある。

浅茅生の小野の篠原しのぶれどあまりてなどか人の恋しき

後撰和歌集卷九恋一の歌(五七七)の詞書に「人に遣はしける」とあるので、元来は次の段階の歌であるが、定家は「忍ぶる恋」の歌としたらしく、等の歌の次に藤原忠通家の百首歌で「忍ぶる恋」を詠んだ俊成の歌を置いている。

一方、卷十二の「玉の緒よ」のほうは物に寄せて詠んだ恋の歌を集めたあたりにある。前の歌(九七六)は謙徳公藤原伊尹の新古今和歌集卷十一恋一の歌(二〇〇三)であり、次(九七八)は紀友則の古今和歌集卷十三恋三の歌(六六七)である。

唐衣袖に人目はつつめどもこぼるるものは涙なりけり

下にのみ恋ふれば苦し玉の緒のたえて乱れむ人な咎めそ

この前後の歌もやはり「忍ぶる恋」を詠んだ歌であり、友則の二句切れの歌の「玉の緒」は人目を避けるために涙の玉を繋ぎとめている「忍ぶる恋」の思いの表現である。このことにより、定家は式子内親王の歌の「玉の緒」を貫之

の歌のそれよりも友則の歌のそれに近いものとして解することにしたと考える。一方、定家は貫之の「玉の緒のたえて短き命もて」の歌も八代抄の巻十二に撰んではいる。貫之の「玉の緒」の歌（九六五）は岩にぶつかる波につれない人への思いを喩える歌の間に挟まっていて、次の歌（九六六）は小倉百人一首の源重之の一首（四八）であった。

風をいたみ岩うつ波のおのれのみくだけて物を思ふころかな

このあたりの貫之と式子内親王の「玉の緒」の歌の配列が離れる事情に関しては、「忍ぶる恋」を恋愛初期のそれと「見れども逢はぬ恋」のそれとに区別して後者に入れ、「玉の緒」の意を別に解することに決したためと考えておきたい。

〔注〕

（1）本稿では中・高・大の接続の観点上、教科書教材には「和歌教材」などとそのことを明記した。旧課程の教科書教材であっても同様に教材として示したが、煩瑣になるのでどの学年のどの教科書に載ったか等は略し、教材は教科書に載った範囲に止めた。なお、小倉百人一首は全て和歌教材なので一々記さなかった。

（2）和歌は岩波書店の新・旧日本古典文学大系所収のもの、また、角川書店の新編国歌大観所収のもの等により適宜検討の上表記を改めるなどした。については原資料が確認できるように歌番号を付けておいた。

（3）式子内親王集にも同文の詞書がある。定家の八代抄巻十二恋二の歌（九七七）の詞書には「百首の歌の中に」とある。百人秀歌の第九十二首は小倉百人一首と同じく、殷富門院大輔の「見せばやな雄島の海士の袖だにも濡れにぞ濡れし色は変はらず」という歌と前後する。なお、題の「忍ぶる恋」の原表記は「忍恋」である。教科書等はこれを「忍ぶ恋」または「忍ぶる恋」としている。本稿では歌の本文に「忍ぶること」とあるので、題も上二段活用の動詞として「忍ぶる恋」とした。

- (4) 便宜上桜楓社の高橋和彦編『無名抄』(一九七五年初版)を利用した。
- (5) 作者の式子内親王(一一四九〜二〇二)は、後白河天皇の第三皇女であり、母は高倉の三位と呼ばれた、権大納言藤原季成の娘成子である。母を同じくする姉に殷富門院亮子内親王(一一四七〜一一一六)、弟に仁和寺の御室となった歌人の守覚法親王(一一五〇〜一二〇二)、諸国の源氏に反平家の挙兵を命じたことで有名な高倉の宮以仁王(一一五一〜八〇)がいる。式子内親王は、皇女の役割として平治元年(一一五九)十月二十五日に賀茂の齋院に卜定され、「萱の齋院」などと称した。卜定は平治の乱の二ヶ月前、二条天皇の時代のことである。その後、六条天皇の時代を経、高倉天皇の嘉応元年(一一六九)七月二十六日に疾病により退下した。
- (6) 栄花物語の当該の場面は物語教材である。物語教材等も岩波書店の新・旧日本古典文学大系所収のものを利用した。
- (7) 道綱の母の歌は小倉百人一首(五三三)、拾遺和歌集卷十四恋四(九一一)。
- (8) 小倉百人一首(四〇〇)。拾遺和歌集卷十一恋一(六二二)。天徳四年内裏歌合で壬生忠見の「恋すてふ我が名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか」という歌と勝敗を競ったことで有名である。
- (9) 冷泉家時雨亭叢書別巻(朝日新聞社、二〇一二年)の明月記で治承五年一月三日の初見参より内親王が崩じた正治三年一月までの式子内親王の移徙、定家の訪問の記録を確認できる。記事に疑問の余地はない。近藤潤一「式子内親王―「忍ぶること」と歌」(『国文学解釈と教材の研究』二六卷五号、一九八一年四月)等参照。